

8 高等教育機関合同公開講座

「函館学」



前期：函館の歴史を探る
第1回

「箱館から函館へー近代の光と影」

講師 函館工業高等専門学校

教授 中村和之

開催日時：平成18年9月2日（土）午後2時～3時30分

開催場所：函館市中央図書館 視聴覚ホール

1. 箱館の歴史をたどる

1) 中世の箱館とその周辺

「宇賀の昆布」の記述や志海苔の「鍛冶屋村」の存在
箱館・戸井館など道南十二館の存在

2) コシャマインの戦いのなかで、上ノ国の蠣崎氏が台頭

茂別館の下国氏との同盟 → 蝦夷が島の戦国時代を勝ち抜く
明朝のアムール川下流域への進出と奴兒干都司ヌルガンとしの設置 → のちの山丹交易

3) 日本海側の松前・上ノ国・江差が蝦夷が島の中心へ

樺太からの交易品（蝦夷錦など）と千島からの交易品（ラッコの皮など）
を押さえる松前の地に注目

4) 江戸時代、箱館の地位が向上

2. 箱館の開港をめぐって

1) なぜ箱館なのか

捕鯨船の避難港・食料補給基地 → 灯油・潤滑油として鯨油が必須

2) 土方歳三が写真を撮影できたわけ → 新しい技術の導入の地

3) 開港した箱館に何が起きたのか

疫病の蔓延 → 幕末の不平等条約のため、検疫権がない
検疫所の設置（1885）とコレラ予防の知識の宣伝

上水道の整備（1889）→ 日本で二番目、日本人によるものとしては最初

4) エンフィールド銃はどこから来たか？

3. 軍港としての函館

1) 「函館山からの眺望はさぞや絶景であろう」 → 一般人の立ち入りは禁止

2) 要塞地帯法（1899）により沢克己らの退去 → 「露探小路」

4. 榎本武揚（1836-1908）から見た世界史と函館

1) 蝦夷共和国が認めた 99 年間の租借地

2) 政治家としての榎本武揚 →

クリミア戦争（1853-56）から日露戦争（1904-5）の間

<史料等>

1. 『庭訓往来』四月状（14世紀に成立した教科書）

この外……宇賀の昆布・松浦鱒・夷鮭・奥うるし……あるいは，異国唐物
・高麗の珍物，雲のごとく霞に似たり。

2. 『新羅之記録』上卷

中此内海の宇須岸夷賊に攻め破られし事，志濃里の鍛冶屋村に家数百有り，
康正二年春乙孩来て鍛冶にマキリ剃刀を打たしめし処，乙孩と剃刀の善悪価を論
じて，鍛冶剃刀を取り乙孩を突き殺す。之に依て夷狄悉く蜂起して，康正
二年夏より大永五年春にいた通るまで，東西数十日程の中に住する所の村々里
々を破り，者某を殺す事，元は志濃里の鍛冶屋村に起るなり。生き残りし
人皆松前と天河とに集住す。



<道南十二館と津軽十三湊>



<函館区役所編『函館区史』より>

3. 蠣崎敏『松風夷談』「戸井村岡部館の古蹟と其發掘物の事」(函館市中央図書館蔵)

文政四年，箱館ノ東ニトイト云フ処ニテ古錢掘出シ洗ヒミカキ候処，文字分リ，大觀通寶・開元・永樂・洪武錢ノヨシ。依右蝦夷地住居ノモノヨリ公儀エ申立ニ付御調子コレアリ候処，凡六十二貫餘有之候由。其外水晶・朱砂ノ類百品餘モ掘出候ヨシ。右トイト申処ニ岡部澗ト申小舟ノカハリノ處コレアリ。陸ニ岡部館トイフ處コレアリ。右ノ処ニ石碑アリ。公辺御役人中ヨリ右石碑石摺リニ申付ラレ，摺候エ共，文字暁ト相分リ申サス。右石摺ノ内ニ「岡部六弥太六代孫岡部六左衛門尉季澄」ト云名ノ所口斗リ顕

然ト分リ候由。昔ヨリ此辺ノ沢ニ折節光リ物度々コレアリ。其所ノ人ニテモ近邊エ行キ見ルコト昔ヨリ禁シ候由。右ノ辺ヨリ石櫃六尺四方有之品一個掘出シ候。右ノ内ハ見申サズ由。内ニハ如何ナルモノ有之候ヤ、外ニ沙汰之レナク、公辺御評議次第被仰出之レ有リヘク由、松前ヨリ申来。依テ記置。

4. 「勅修奴兒干永寧寺記」1413年（抜粹）

惟だ東北の奴兒干国は、……其の民は吉列迷及び諸種の野人と曰い、焉に雑居している。皆（中華の）風を聞き化を慕っているが、未だ自で至ることが出来ない。況其の地は五穀が生ぜ不、布帛を産ぜ不、畜養のは惟だ狗だけである。或は野人が口を養い、口を運び諸な物を用っている。或は魚を捕える以を業と爲て、肉を食べ而に皮を衣ており、弓矢を好む。諸般の衣食之艱は、言に爲ことが勝不ほどである。……永樂九年春、特に内官の亦失哈等を遣し、官軍一千余人を率い、巨船二十五艘で、復た其の国に至り、奴兒干都司を開設した。……十年冬、天子は復た内官の亦失哈に命じて其の国に載至らせた。海西自り奴兒干に抵り、海の外の苦夷の諸民に及ぶまで、男婦に賜うに衣服・器用を以てし、給えるに穀米を以てし、宴すに酒饌を以てしたところ、皆踊躍て懽忻び、一人も梗化して率わ不者は無かった。上は復た金銀等の物を以て地を擇んで寺を建て爲せ、斯の民を柔化し、……十一年秋、奴兒干の西に、満涇という站があるのを卜んだ。站之左は、山が高く而に秀麗であつた。是より先、己に観音堂が其の上に建てられていたが、今寺を造り佛を塑つたところ、形勢は優雅で、燦然として観る可ものがあつた。国之老も幼も、遠きも近きも濟々争つて……

5. 「重建永寧寺記」1433年（抜粹）

（宣徳）七年、上は太監の亦失哈と同都指揮の康政に命じて、官軍二千と巨艦五十を率いて再び至らせた。民は皆故の如であつたが、独り永寧寺が破毀され、基址が存っていた。之を究審したところ、其の口（野？）人と吉列迷で寺を毀した者は、皆悚れ惧いて戦慄り、之を憂れ戮されると以つた。而し太監の亦失哈等は、皇上の生を好み遠きを柔げる之意を躰して、特に寛恕に加い、斯の民の謁する者を、仍ち宴すには

酒を以^{もち}い、給^{たま}するには布物^{もち}を以^{もち}いて、愈^{ますます}撫^ほ恤^ごした。是^{これ}に於^よつて人民^{たみ}は老^おいも少^{わか}きも踊^{おどり}躍^{あが}つて歡^{よろこ}忻^こび、咸^{みな}噴^{ほめ}々^{そや}として曰^いうには「天^{てん}の朝^{ちやうてい}には仁^に徳^{とく}の君^{くん}が有^あつて、乃^{いな}に賢^{けん}良^{りやう}の佐^さも有^ある、我^{われ}が属^{ふくぞく}するの^のに患^{しんぱい}は無^ないのだ」と。時^{とき}に衆^{しゆ}で議^ぎつて西^{さい}の郭^{かく}に原^{もと}の寺^{さい}を再^{さい}建^{けん}し、敢^{あへ}て復^また治^しし不^ないことにした。遂^{すなは}ち官^{くわん}に委^{あづか}ねて重^{おも}造^{つく}させ、工^{たくみ}に命^{めい}じて佛^{ほとけ}を塑^{つく}らせ、勞^{あつ}せずして畢^{おわ}つた。華^{あや}麗^{うら}にして典^{てん}雅^がであり、先^まよりも優^す勝^ぐれていた。国^{くに}の人^{ひと}は遠^{とほ}いも近^{ちか}いも無^なく、皆^{みな}来^やつて首^{くび}を頓^かげ、謝^{あや}して曰^いうには「我^{われ}等の臣^{しん}服^{ふく}は、永^{なが}きこと疑^{うたが}いも無^ない」と。

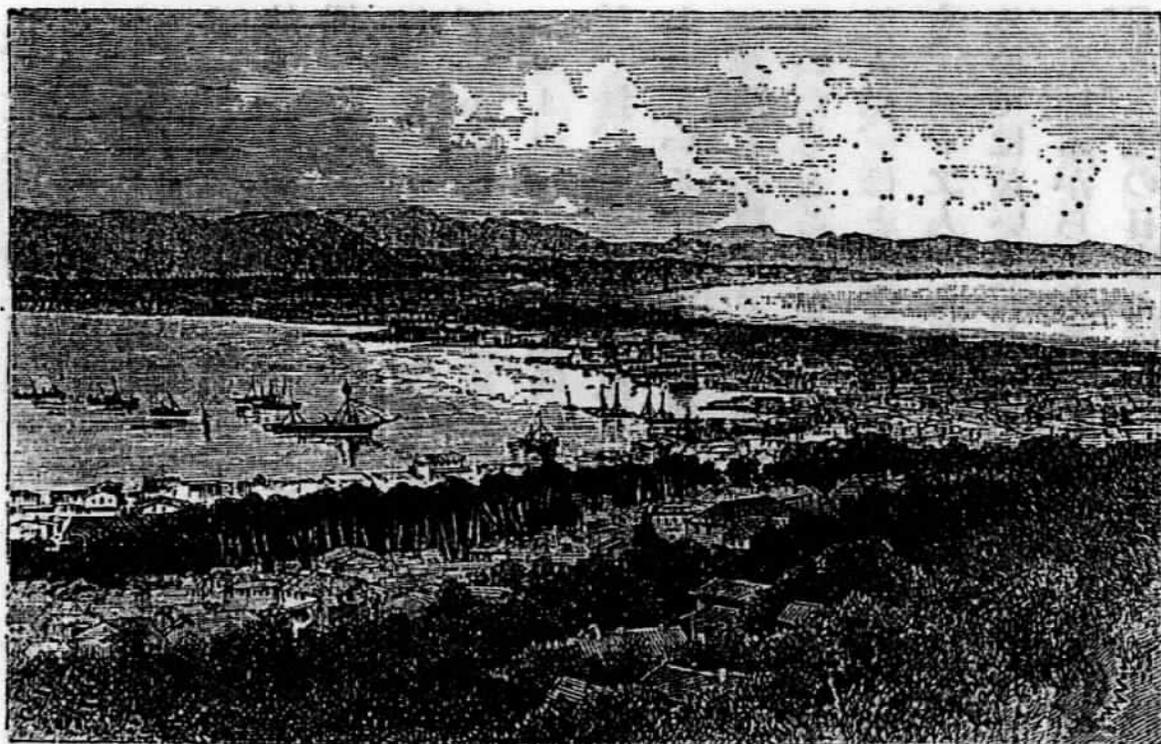
6. グスタフ・クライトナー『東洋紀行』 1878年8月

ヨーロッパ系入植者は、その数およそ二〇人で、鯨、鮭、鹿の枝角、鹿皮、熊の毛皮の輸出にたずさわっている。わたしの滞在中、港には二隻のフランス軍艦と一隻のロシア軍艦が停泊していた。蝦夷島のいたるところをわがもの顔でのし歩いているロシア人は、ほとんど好感を持たれていない。というのも、ロシア人は自分をもうこの島の主人と考えているのではないか、という懸念が、住民の間にひろがっているからである。ここに住んでいる日本人が、日本本土の日本人ほど、ヨーロッパ人に対し一般的に友好的でないのも、そこに由来するのかもしれない。彼らはヨーロッパ人を避けるし、それどころか、ヨーロッパ人の姿を見ると唾を吐く。本土の日本人とはたいへん仲良くつきあうことに慣れたわたしにとって、こうした反感のしるしは、なおのこと不愉快に思えた。

四・五里進んだところで、最初の日本人農場を見かけた。それは天皇の所有になる農場である。蝦夷を植民地化する構想が定着した一八六八年以来、日本人は、日本でいわばまったくなおざりにされている部門の農業および畜産を蝦夷に根づかせようと努力を重ねている。この七重農場は、山麓の、海まで平らにひろがるみずみずしい緑の草原の真ただ中であって、絵のように美しい。海拔約一〇メートル。高い林檎の樹や榎、椴に囲まれ、いかにも穏やかだ。

函館知事の添え書きを見せると、ヨーロッパを手本にして造作した農場管理事務所に勤務する天皇の官吏たちが、愛想よく親切に出迎え、農場を隅々まで案内してくれた。厩舎の三六の仕切りの中には、二六頭ほどのポ

ニーがいた。ほとんどが地元の産で、体軀は小さく、ずんぐりしている。たてがみや尻尾は、手入れはされているがもじやもじやな多毛質であることをはっきり示している。農場の馬たちは、ほかの日本の馬から見ればうらやましい限りの暮らしぶりをしている。



<クライトナー『東洋紀行』より「函館」>

7. 『函館新聞』1904年2月10日（前日の号外の再録）

露探嫌疑者として、其筋の密偵中のもの少なからざる由は兼ねて耳にする所なりしが、果然一昨日午後六時より九時十五分までの間に、左記十七名は二十四時間内に要塞地帯外に退去を命ぜられたり。

<参考文献等>

1. 臼井隆一郎『榎本武揚から世界史が見える』PHP研究所，2005年。
2. 能戸庄平「函館市の史跡めぐり（西部方面）」
<http://www11.plala.or.jp/hakowest/kankou/kankou.htm>
3. 奥武則「むかし、『露探』という言葉があった—函館の場合」
(函館日口交流史研究会) <http://moct.web.infoseek.co.jp/blog/>
4. 函館区役所編『函館区史』函館区役所，1911年。